

絶滅危惧種

瓶子 明 弘*

heishi_ak@jim.kit.ac.jp

〇はじめに

今回、広報誌への寄稿についてご依頼を受けたとき、正直言って大変驚いた。いつも第三者の立場で拝読していた私としては、およそ寄稿文というものは先生方の格調高い論文のようなものであって、事務方の私には無縁のものと思っていたからである。さっそく、丁重にお断りのメールを返そうとしていた時、担当の方が直接来られ、「たまには教員以外の人にも寄稿いただきたいので」、また「センター長からは是非にとのことなので」とのこと、なかなか断りづらくなってしまった。ただ一方で、2020年の3月末で本当に最後の定年(再雇用の5年目満了)を迎えるにあたり、「ここで自分の過去を振り返ってみるのもいいかもしれない」、そういう思いもあったので、とうとう引き受けてしまった。願わくは読者の皆様には、これから始まる稚拙な文章をどうか肩の力を抜いて気楽にお読みいただければ幸いである。

ところで、なぜ私に白羽の矢が立ったのか、それはおそらく私が長年にわたり本学の事務用コンピュータに関わってきたからだと思われる。本来であれば、事務サイドを代表して情報科学センターへ有用な提言を行い、示唆に富んだ意見の一つでも述べるのが私に期待されていたところと考えられるが、何分そのような見識も能力も持ち合わせていない。そこで、コンピュータに長年かかわってきた私の経歴をお話させていただくことで寄稿文に代えることをお許しいただきたい。

〇国鉄時代

私は大学卒業後、日本国有鉄道大阪鉄道管理局(現 JR 西日本)に入社した。昭和 52 年の春

である。特段鉄道ファンであったという訳ではないが、父が国鉄の通信技師であったこと、薄給ではあったが収入が安定していたことなどが入社理由だ。最初の配属先は東海道本線茨木駅で、改札やホームの案内など一通りの駅業務を経験した。

入社から2年後、私の人生を大きく変える出来事があった。それは、社内で将来のコンピュータ基幹要員として毎年全国の若手から若干名を選抜する試験があり、それに合格したことだ。合格者は東京の中央鉄道学園(中央線国分寺駅と西国分寺駅の間に位置し、国鉄教育機関の総本山ともいえる全寮制の施設)に集められ、3カ月間みっちりコンピュータ教育(主に COBOL という事務処理用プログラム言語: Common Business Oriented Language)を叩き込まれた。

この研修を終えるとすぐに駅長から内示があり、翌日から私は大阪駅前にあった大阪鉄道管理局経理部情報管理室に異動となった。最初の一年間はオペレーターとして各種の電算処理の操作のみを行う仕事をした。具体的には、各システム担当者からの指示書に従い、磁気テープや 100M の磁気ディスクパックの着脱、プリンターの用紙セットなどを行い、コンソールからジョブを実行させるという仕事である。(“100M の磁気ディスクパック”とは、今思えばわずか 100Mbyte の容量ではあるが、直径 50cm 厚さ 20cm 重さ約 10kg ほどの円柱形のパックで処理の都度装置に付け替えるのである。現代ではこの数百倍の記憶容量がスマホとして万人のポケットやカバンに入っているのだから時代を感じずにはいられない。)

当時、大阪鉄道管理局にあったコンピュータは ACOS(エーコス)というマシンで日電・東芝系グループのものであった。その時代、日本の通産省は世界の巨人 IBM 等に対抗するため、

* 情報管理課再雇用職員 (元情報化推進室長)

前出のメーカーのほか、富士通、松下、日立、沖など国内大手の数社をいくつかのグループに分け、それぞれに技術の向上を競わせていたのである。

さて1年間のオペレーター経験を経て、翌年から晴れてシステム担当者となった私は、旅客、貨物、施設の3つのシステムを担当した。前者二つのシステムは主に運輸統計上のバッチ処理であった。旅客システムというによく誤解されるのが座席予約システムであるが、これは全国の駅にある“みどりの窓口”から当時はパラボラ経由で東京都国立市にあった中央情報システム管理センターというところで一元管理されていたもので、MARS(マルス)という名のシステムである。担当したシステムのなかで施設システムだけは少し毛色の変ったものであった。マヤ車といわれる軌道の狂いを検出する車両(これの新幹線版がドクターイエロー)で採取したアナログデータをデジタル変換し、最終的に保線区の作業計画書を作成するというシステムであった。後学のため実際に大阪環状線でマヤ車に乗り込んだことが一度だけある。車内には数台の磁気テープ装置とともに、まるで心電図のオバケみたいな巨大なチャートがあり、同乗している保線区の助役たちは自分の区間が終わると、すぐにその区間のチャート紙をちぎって持ち帰る、という光景が印象に残っている。

システム担当の5年間は、日々COBOLプログラムとの格闘であった。新規で自ら作成したプログラムはどのような修正にでも対応できたが、問題は他人が作ったプログラムのバグを追いかけることである。特に古いものはGOTO文が随所に使用され、いわゆるスパゲティープログラムといわれる状態になっており、制度の改正などによる修正作業は困難を極めた。

COBOL屋稼業も板についたころ、国鉄には民営分割化という大きな波が押し寄せていた。ある日室長から、突然総務部人事課への異動を命じられた。当時の大阪鉄道管理局職員は一万数千人おり、その民営分割化後の会社(JR各社)への振り分け作業をオフコンで、しかも秘密裏に遂行せよ、とのことであった。実際の作業については当時の総務部長や人事課長から直接指示が出され、今も詳細を明かすことははばかれ

る内容であり、後日機会があればお話ししたいと思っている。

ただここで人事課へ移ったことが後に私が本学へ来ることとなった大きな要因となる。ある日、人事課の同僚から各省庁への転出希望者を人事課で募集する、という話を聞いたのだ。いわゆるインサイダー取引ではないが、民営分割化の将来に一抹の不安を覚えていた私は即座に応募した。かくして昭和62年4月、国鉄の民営分割化と同時に私は京都工芸繊維大学へ赴任したのである。

○京都工芸繊維大学へ

本学での配属先は会計課出納係で、私は主に給与の電算処理を担当することとなった。(当時、多くの企業や役所では電算部門は財務会計系に属していた。電算導入のきっかけが給与計算であることがその理由である。)

その後、教務システムを既存のもの(メインフレームは情報処理センターのACOS、端末はNECのオフコンN6300)から事務用計算機(ホスト、端末とも富士通Kシリーズ)に移行することとなり、私を含め数名の事務官が新設された会計課情報処理係に集められ、プロジェクトを組んで対応することとなった。しかし、ソフトの開発期間がほとんどなかったため、本学と同規模で理工系の大学である九州工業大学の教務システム(NEC製オフコンで稼働)を無償でいただき、本学用に移植することとした。言語はともにCOBOLであり一応CODASYLという世界標準規約に則っているのですがすぐに移植できるものと思っていたが、画面の入出力や帳票の定義などはNECと富士通では大きく異なるという問題があり、完成は運用開始ギリギリとなった。この新教務システムの稼働開始とともに、平成元年4月、私は学生部学生課に新設された教務情報管理係へ配属され、入試システムとともに開発、メンテをその後長きにわたり担当することとなる。

とりわけ教務事務は大学ごとに制度が異なるので、本来であればシステム作成時における基本的な設計思想は本学独自のものが必要であるが、いかんせん前述の理由により、そうはなっていなかった。このことが後に教務担当者を苦

しめることとなる。その後幾度となく繰り返される大学設置基準の改定に伴い、カリキュラムの大綱化が実施された。昭和の時代から続いていた一般教養科目の「人文」「社会」「自然」などのカテゴリーは廃止され、大学の独自性が認められた。本学では群・類などの科目区分を経て現在に至っている。(ただし、繊維学部と工学学部では同じ群でも内容は違っていた。)

特に学年進行に伴う科目の振替措置は学生にとって卒業要件に関係するため、受講登録時におけるエラーチェック(適正な卒業要件単位とするための科目属性の修正作業)は大きな負担となっていた。このことは、ひとえに私の力不足であったと反省している。

○昭和から平成へ

時代は昭和から平成へと変わり、事務の電算化はますます加速され、ありとあらゆるものがシステム化されていった。が、平成の時代になって最も大きく変化したのはインターネットの普及である。当初パソコンは各係に1台のみが配置され、主にワープロの代わりに使われていた。その後一人に一台が配備され、文書作成や表計算など本格的な業務上での使用が始まった。メールは当初グループウェアのメール機能を利用してたと記憶している。それでもまだ導入当時はメールでの連絡は絶対的なものではなく、あまり見ていない人もたくさんいた。こんな川柳があった。「イーメール、電話で見ると、催促し」そんな時代だった。

インターネットの普及とともに各業務システムもクライアント/サーバ型のシステム、さらには今日のような形態に進化していき、その業務システム数も数十種類に達している。もはや電算担当者もネットワークの知識なくしてはなにもできない時代となってきている。このような時代背景もあり、近年では事務系サーバも情報科学センターが一括管理する全学の仮想サーバ傘下に加わる形となった。その実現には、仕様書の作成から契約にいたるまで、情報科学センターの先生方や技術系職員さんらの多大な協力があつたことは言うまでもない。このことは今でも深く感謝している。

それにしても、現代社会におけるセキュリ

ティ上の諸問題は永遠のテーマかもしれない。いつ本学でインシデントが発生し、社会に対してその責任を問われるシーンが訪れてもけっして不思議ではない。情報の関係者とりわけ責任者はいつもそのリスクと背中合わせで日々を暮らしている。可能であれば、セキュリティに必要な費用はよりスムーズに大学として対応いただけるよう願うばかりである。

○おわりに

結局、私の半生を振り返るだけの内容になってしまったが、社会人生活のほとんどを事務の電算化に従事してきたことを今更ながら自覚することとなった。時代は平成から令和へと移り、世間では5GやAIがこれからの情報化社会の鍵を握っているといわれている。確かに40年前に初めてコンピュータと出会った頃のことを思えば、技術の進歩には目を見張るものがある。昔を懐かしく思うとともに、もう私の出る幕はない、そう思っていた。ところが最近、こんな記事を目にした。厚生労働省の不正統計に関する記事だ。

『システム改修を行った担当係によると「外部業者等に委託することなく自前でシステム改修を行うが、毎月勤労統計調査に係るシステムのプログラム言語はCOBOLであり、一般的にシステム担当係でCOBOLを扱える者は1人又は2人に過ぎなかった」。このため、ダブルチェックができなかった。』

なんと、業種によっては今でもCOBOLで組んだプログラムが稼働しているというのだ。その後よく調べてみると、今や絶滅危惧種とも言われるCOBOLが使えるSE・プログラマーは年々引退の時期を迎えており、その数は減ってきている。しかし、レガシーとなったシステムでも今現在問題なく稼働していれば、経営者はそこに新たなコストをかけてまで環境を変えようとはしない。その結果、なにか問題が生じたときにCOBOLプログラマーは必要となってくるのである。老後2000万円不足問題も他人ごとではない。ボケ防止と実益を兼ねて、COBOLプログラマーとしてなにか社会に貢献できることはないだろうか、と今ひそかに企んでいる。